白山開山 1300 年祭　基本理念

「みんなでつくる郡上　－人と自然が調和した　交流文化のまち－」これは郡上市まちづくりの基本理念です。

この「人と自然の調和、交流文化」の起源というべきできごとが、今から 1300 年前の西暦 717 年(養老元年)、奈良時代の高僧・泰澄大師が、それまで神のすむ神聖な霊山として人が足を踏み入れることのなかった「白山」に初めて登頂した「白山の開山」であったといえます。

この泰澄大師による白山開山が、自然崇拝の山(神)と人の智恵(仏教)とが融合した神仏習合・白山信仰の始まりとなり、白山山麓の加賀、越前、美濃の三馬場と禅定道(登山道)筋にはそれぞれ寺社や集落が形成され、人、物、情報などが行き交い、白山山麓特有の生活文化が培われてきたのです。

郡上市はその三馬場のうち、白山信仰の太平洋側の拠点である「美濃馬場」が置かれた地であり、「美濃禅定道」における白山登拝への登り口として、かつては「上り千人、下り千人」といわれるほど多くの来訪者を集めました。

また、郡上からも「御師」と呼ばれる人たちが、白山の信仰を広めるため日本の各地へ出向くなど、白山とその信仰を通じたさまざまな人や地域の交流がありました。

そのような交流の歴史から生まれた文化は、郡上おどりや白鳥おどり、市内各地に伝わる神楽などのさまざまな伝統芸能や、遠く東北・奥州藤原氏寄進の虚空蔵菩薩坐像をはじめとする多くの文化財として今に息づいています。

西暦 2017 年(平成 29 年)は、このように郡上の成り立ちにも大きな影響を与えた白山の開山から 1300 年目という記念の年となります。

郡上市では、この重要な節目となる年に 1300 年の悠久の歴史を見つめ直し、白山の自然と信仰が育んだこの白山文化を若い世代や子どもたちへ継承するとともに、環白山地域間の交流・連携を通じ、まちづくりの基本理念への理解がさらに深まるよう「白山開山 1300 年祭」に取り組んでまいります。

■ 白山開山 1300 年祭事業テーマ

つなげよう　悠久の歴史に息づく白山文化

◆ 悠久の歴史のなかに　今がある

・白山開山を契機として育まれてきた文化は、1300 年の時を超え、郡上市のめざすまちづくりの理念として息づいています。

◆ つなげたい　次世代へ

・白山とその信仰に培われた、人と自然との共生・歴史に育まれた芸能や文化・地域交流を、この 1300 年祭を機会として今一度みつめ、次の世代へとつなげていきます。

白山開山 1300 年祭　基本方針

2017 年(平成 29 年)に白山開山 1300 年を迎えるにあたり、基本理念に基づき、下記の方針に関わる事業を推進します。

1,　人と自然との共生

白山開山 1300 年祭を通じ、白山の自然への畏敬とともに続いてきた人々の営みを見つめ直し、豊かな森林と清流に恵まれた郡上における人と自然との共生の在り方について考える機会とします。

2,　白山文化の再認識と継承

白山の開山から 1300 年の歴史と伝統に培われた、白山をめぐる文化を今に生きる私たちが再認識し、次世代につなげていくとともに、郷土に対する誇りと愛着を高める契機とします。

3,　白山を通じた交流と連携

白山開山 1300 年祭を機会に、イベント等を通じて長い歴史の中で築かれてきた白山麓の交流をさらに深め、さまざまな地域との連携を高めていきます。

郡上市白山開山 1300 年祭ロゴマーク募集要項資料

■　基本理念に基づく３つの方針について

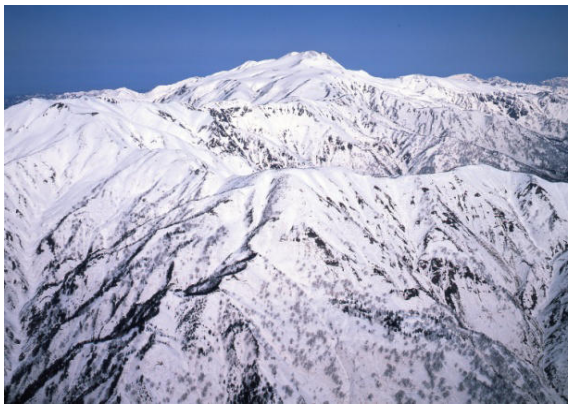
1,　人と自然との共生

白山に降り積もった雪は川となって大地を潤し、 たくさんの生命を育みながら海へと注ぎ、やがてまた雪となって白山に還って行きます。

白山は、この水の循環に象徴される「再生」のシンボルとして、また長良川流域の人たちからは、暮らしを支える水の源にそびえる清らかな山として畏敬と崇拝の対象とされてきました。

白山の開山から 1300 年を経た現在、自然の保全と利用が調和した営みは世界農業遺産「清流長良川の鮎」の認定や、白山のユネスコエコパーク拡張申請推薦へと繋がり、人と自然が共生する「持続可能な社会」づくりは、今後も大きな注目を集めていくと考えられます。

白山開山 1300 年祭を通じ、白山の自然への畏敬とともに続いてきた人々の営みを見つめ直し、豊かな森林と清流に恵まれた郡上における人と自然との共生の在り方について考える機会とします。



阿弥陀ケ滝（日本の滝百選）

国の特別天然記念物
石徹白の大杉

清流　長良川

2,　白山文化の再認識と継承

・白山の開山をきっかけとして、自然崇拝の山から神仏習合に彩られた観音の聖地となった白山は、「越(こし)の白山(しらやま)」とも讃えられ、憧憬と信仰の対象とされてきました。白山に対する人々の思いは、一流の歌人たちが詠んだ和歌などの文学や、神と仏への信仰に基づく仏像や工芸品などの芸術の源となりました。

また、白山からの水を通じた農耕、養蚕や漁業などの生業(なりわい)から生まれた白山麓の民謡や踊り、白山の神へ奉納される神楽などの祭礼芸能、白山麓の厳しい自然と信仰とが融合した石徹白の御師住宅の独特のたたずまいなど、人々の白山への信仰と営みが織りなす中にさまざまな文化が生まれ、今に継承されています。

白山の開山から 1300 年の歴史と伝統に培われた、白山をめぐる文化を今に生きる私たちが再認識し、次世代につなげていくとともに、郷土に対する誇りと愛着を高める契機とします。

【銅造虚空蔵菩薩坐像】
（石徹白大師講）

【五段の神楽】
白山中居神社　春の例大祭

【長滝の延年】

【木造釈迦如来及両脇侍像】（長瀧寺）

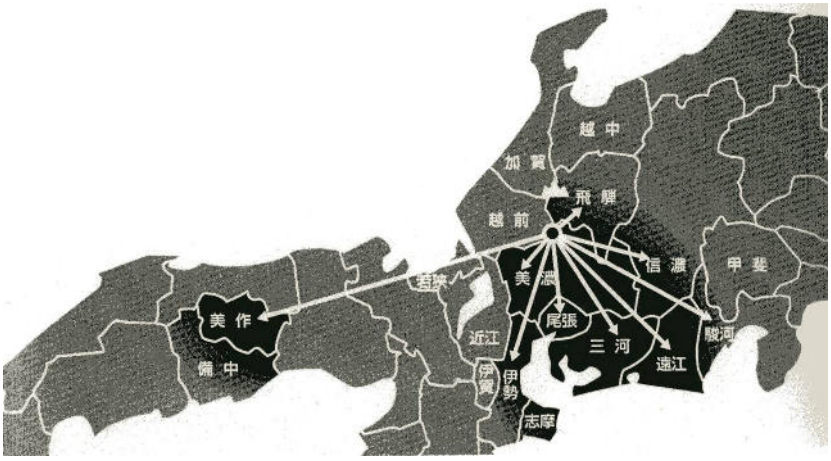
【石徹白の御師住宅】

【白鳥の拝殿踊り】

3,　白山を通じた交流と連携

・今に残る白山山麓の様々な伝統的建築物や民俗芸能は、白山登拝に訪れる人々や、白山の信仰を広めるために各地に出向いた「御師」たちの地域を越えた交流によって生まれたものといえます。

現代にあっては、「三馬場サミット」「義経ゆかりの地サミット」「姫神コンサートによる奥州・毛越寺延年と長滝の延年との交流」「白山山麓民謡名人大賞」など白山文化に関わる催しが行われてきました。そして、郡上おどりや白鳥おどりには毎年多くの人々が訪れています。白山を通じた長い歴史の中で築いてきたこうした交流をさらに深め、さまざまな地域との連携を高めていきます。



【白山信仰を広めた石徹白の御師】
各地の古文書や、石徹白内に残る御師の檀那場帳の記載をもとに石徹白御師の活動の範囲を図化したものです。主に東海一円を中心に信州や中国地方の一部までと広範囲に活動していたことが窺えます。

【平成元年の「義経ゆかりの地サミット】
北は青森県市浦町、南は和歌山県田辺市など、奥州藤原氏とゆかりのある全国８市町村が集まって開催されました。

【平成４年の「姫神コンサート」】
昭和 62 年、平成 4 年、平成 8 年の 3 回実施され、岩手県毛越寺の延年との共演や、青森県市浦村の郷土芸能「相内の太刀振り」の披露などが行われました。

【白山山麓民謡名人大賞】
白鳥をはじめ、白山を取り巻く地域に伝わる民謡の保存伝承を目的に、さまざまな地域から参加した出場者がその技を競い合いました。